

正義とする義を顕すなり。(同)  
と、正行の中の正定業である称名念仏こそが阿弥陀仏の本願に誓われた行であり、正しく浄土への往生行であることを述べ、本願章の随文解釈の中で、重要なと思われるのは、

是の如く往生の行種々不同にして具さに述べべからず。即ち今は前の不施・持戒乃至孝養父母等の諸行を選び捨てて、専称仏号を選び取る。故に選擇と云ふ也。

〔真聖全〕五卷一五四頁  
についての解釈であろう。この文について、

正く選擇本願の義顯也。されば弥陀の本願は専称仏号也、専称名仏号の外は往生の正因に非ず。此義を成ずるを此集の所詮とする也。(同)  
と解釈している。すなわちこの「選択集」の文こそが選擇本願の義であるとし、阿弥陀仏の本願は称名念仏が往生の正因であり、その他の行は往生の正因ではないとしているのである。そしてこの義こそが、「選択集」の表すところであると述べられているのである。

さらに本章には、「仏説無量壽經」に説かれる第十八願とその成就文を次のように解釈している。すなわち、

「十方衆生」と云は、善人悪人・有智無智・有罪無罪・男女・老少・一切有情を摂する言也。「至心信樂欲生」と云は三信なり、「觀經」に説

くところの三心則是也。所謂至心は至至誠心、是真实心なり。信樂は深心、これ深信の心也。欲生は廻向發願心、これ願往生の心なり。「乃至十念」と云は行体を顯はす。名号を稱する事上一形を尽し下十念にいたるまで、みな往生の因なり。(同一五〇一―五五一頁)

「諸有衆生」と云は十方衆生なり。「聞其名号」と云は南無阿弥陀仏を聞也。「信心」と云は至心也。「歡喜」と云は信樂也。「乃至一念」と云は、乃至十念の願なほ一念に至極する事を顯はす也。「至心回向」と云は、如来他力の回向なり。「願生彼國」と云は欲生の心なり。此三信を發すれば、如来他力の回向に依て即往生を得と云也。(同一五六頁)

である。ここで説かれる事については、まず第十八願文の解釈は「乃至十念」が往生の因であることを述べる以外、随文解釈にとどまっているといえよう。それに對して成就文では、十方衆生が「南無阿弥陀仏」の名号を聞き、至心・信樂・欲生の三心を發して乃至一念すれば、阿弥陀仏の利他の回向によって往生を得ることができるとする。すなわち正しく先の文で阿弥陀仏の本願(第十八願)には称名念仏一行が往生の正因であることを明確に表した上で、この第十八願成就文では、衆生が称名念仏と三心を發するならば如来廻向より往生することができる

しているのである。それは次の一文をもつても明確である。

因願にはかくのごとく十念と説たるを、願成就文には「乃至一念」と説けり。是易行の中の易行を顯はすことば也。…(中略)…されば往生の爲には又別の因なし、至心・信樂・欲生の心を以て乃至一念せん者、皆悉往生すべし。

〔真聖全〕五卷一五一頁  
ただし、言うまでもなく「第三、本願章」では他にも重要なことが多く述べられている。すなわちいわゆる総別二願・

選擇撰取・難易勝劣・念声是一などであるが、「註解鈔」では、その部分については全く触れられていないのである。そこには存覚の「選択集」に対する問題意識が如何にあったかという事が浮かび上がってくると思われるのである。

なお本論は、「龍谷大学仏教文化研究所紀要」第五二集所載の「指定研究「選擇註解鈔」の研究」をベースにしたものであるが、現今では研究途上のものであり、詳細については、今後、共同研究の成果として発表を予定するものである。

## ◇ 研究概要報告 ◇

平成二十五(二〇一三)年度本研究所の研究計画は、指定研究二件(継続二)、常設研究三件(継続三)、特別指定研究三件(継続三)、共同研究四件(継続二、新規二)、そして個人研究一件(新規一)が設置され、合計十三件の研究プロジェクトが構成された。次に示すような具体的な計画のもと、総研究員数二三三名の協力によって推進される。

本研究所は研究事業として、仏教文化講演会を七月十一日に第八十回(「法滅」からの再生―東大寺再建における西行を中心に―)を、また十一月二十八日に第八十一回「真宗におけるカウンスリングプロセス―生きる喜びの成就―」を開催している。研究成果として「佛教文化研究所紀要」第五十二集に共同研究他の報告論文八編の他、仏教文化講演会の講演記録を収めた。善本叢書としては、「中世歌書集」(責任編集者 大取一馬氏)、また仏教文化研究叢書としては「戒律を知るための小辞典」(責任編集者 浅田正博氏)、「対人援助をめぐる実践と考察」(責任編集者 吉川悟氏)が出版された。これらは、水年の研究成果によるものである。

A 指定研究（龍谷大学図書館蔵の貴重書の研究・出版）  
I、日本語日本文学 龍谷大学図書館蔵中世歌書の研究（三年次）

主任・大取 一馬 研究員三七名

（研究の目的）

本プロジェクトの一年目では善本叢書に収めるべき典籍「光剛百首」、「愚見抄」、「詞字注」、「後鳥羽院自讃歌注」、「九代抄」の五点に関して、まずは本学図書館蔵本の書誌的な研究をし、諸伝本があるものについては各図書館にある伝本を調査し、本学所蔵本の位置づけをすることを目標としていたが、所期の目的は八割程度出来たものと思われる。また、その成果の一部は平成二十三年十一月に行った仏教文化セミナーで発表したり、仏教文化研究所の研究叢書「典籍と史料」をはじめ各論文集に掲載した。本年度は三年目に入るが、これまでの研究成果を次の仏教文化研究所紀要にまとめて掲載することになっている。また、平成二十五年五月中に善本叢書を刊行すべく、現在、思文閣出版で見積書を作成していただいている。今回の善本叢書は、解題を含んで約六〇〇頁の予定で、「中世歌書集」として刊行することになっている。

（研究計画）

上記に三年間の研究計画とその方法を略述したが、本研究では、実際に資料の内容検討を通して、伝本の位置づけと、内容上の意義を明らかにすることにしたい。また、各資料を日本和歌史の上でどのように位置付けることができるのかについても合わせて考察したい。それには、当該資料の検討だけではなく、広く和歌史の勉強も合わせてする必要があるものと考えている。

なお、三年目に善本叢書を出版した後、四年目には、三年間の研究成果として研究者全員で原稿を執筆して研究叢書を出す予定にしている。

2、真宗学 選擇註解鈔の研究（二年次）

主任・川添 泰信 研究員一三名

（研究の目的）

本研究は、まず一年目に次のとおり基本資料の収集をする。  
写本、「選擇集註解鈔」在覚・五卷五冊（大宮図書館写字台文庫・常楽台旧蔵本）

第一卷・第二卷、応永二十二年（一四一五）五月、松下隠士某書写

第三卷、顯惠書写

第四卷・第五卷、寛正四年（一四六三）八月、明覚書写（イソシマ本）

写本、「選擇集註解鈔」（本派本願寺蔵）

第一卷・第四卷・第五卷（イソシマ本）

第四卷（顯惠本）

第一卷～第五卷（応永本）

版本、寛文二年（一六六二）壬寅年秋吉日 吉田庄左右衛門板行

版本、寛文二年（一六六二）壬寅年秋吉日 大阪心齋橋筋唐物町 北田清左右衛門

二年目には、資料の比較研究ならびに底本の翻刻をする。

三年目には、研究の総括と論文執筆をする。最終的には、「善本叢書」として出版する。

本研究は、写本、「選擇集註解鈔」在覚・五卷五冊（大宮図書館写字台文庫・常楽台旧蔵本）

第一卷・第二卷、応永二十二年（一四一五）五月、松下隠士某書写

第三卷、顯惠書写

第四卷・第五卷、寛正四年八月、明覚書写

を底本とし翻刻を行う。翻刻に際しては、写本、「選擇集註解鈔」（本派本願寺蔵）

第一卷・第四卷・第五卷（イソシマ本）

第四卷（顯惠本）

第一卷～第五卷（応永本）

版本、寛文二年壬寅年秋吉日 吉田庄左右衛門板行

版本、寛文二年壬寅年秋吉日 大阪心齋橋筋唐物町 北田清左右衛門

の写本および版本を参考にして行う。なお、その他「選擇集註解鈔」は「浄土宗全書」八卷（四六九～五三〇）にも収載され

## B 共同研究

### 1、仏教学 説一切有部思想史の文献学的考察（二年次）

主任・青原 令知 研究員四名

（研究の目的）

本研究は説一切有部の思想史について文献学的考察を通じて解明し、個々に独立した論書群を一つの糸に繋ぎあわせ、従来の研究によってもなお不明確であった思想史の流れを明らかにすることが最終目的である。

現在のアビダルマ仏教研究が高度に多様化、細分化している中、説一切有部研究においては、「俱舍論」とその註釈文献、『婆沙論』周辺の諸論書、六足論の三つの論書群にその研究領域が大別される。これは思想的に見れば、確立期→発展期→黎明期という発達段階を表わし、それらの間の関係性も種々に考察がなされている。しかし、梵文などの新出資料の文献研究が進む中、より緻密な文献批判が要求されるようになり、従来の文献に基づく見解も修正を余儀なくされる場合も少なくない。また古来より存在が確認されている文献の中であつてもいまだに全貌が明かされていないものも多くある。

本研究においては、上述の三つの研究領域においてそれぞれ文献批判を行ない、当該分野の研究者のために資する資料を提示すること、さらにはそれにより有部思想史の断面を明らかにすることを当面の目的とする。具体的には次の三点に集約する。

- 一、従前の複数の共同研究の成果により本学に将来された、十数点に及ぶ俱舍論関係サンسكريット諸写本のマイクロフ

ているが、何本によつたのか解説がないので不明である。

研究については、法然が明らかにした『選擇集』については、法然浄土教が宗派として展開する過程において、門弟において種々の解説書が示されてきた。親鸞門流において、存覚の『選擇集註解鈔』はもつとも初期の『選擇集』理解であり、『選擇集』がどのように解釈されていたのか、また日本における浄土教の理解はどのようなものであつたか、について明らかにすると共に、真宗初期の浄土教理解について明らかにする。

イルム複製は、それ以降整理されぬまま手つかずの状態になつてゐる。また入手しうる写本複製の網羅的な収集を目指しながら、数点がいまだ未入手である。この俱舍論関係の写本資料の整理が急務である。

- 二、説一切有部教学史の上でキーポイントである『婆沙論』の成立史を探るため、二〇〇巻全体を俯瞰できるような資料を作成し、各章節の新古を明らかにして成立事情の一端が明らかになるような結論を導き出す。

- 三、黎明期のいわゆる六足論は、それを研究対象とする学者が少なく、不明確のまま放置されているのが現状である。特に『俱舍論』時代まで展開する用語の変遷を明確にすることで、思想史の最初の流れを解明する。

二年目にあたる本年度は初年度の反省をふまえ、上記一のテーマは暫く凍結して二を重点的に進め、資料の収集と整理に努めるとともに三も同時並行して考察を加える。

（研究計画）

- 一、俱舍論関係写本について、未入手の写本複製は早急に入手すべく関係機関と交渉し、すべての写本複製を完備したい。同時に現有資料の整理、特に称友（*Asomitra*）の俱舍論註（*Sphurita*）の諸写本の校合作業を進める。将来的にあらたな校訂本の出版も視野に置き、当面は従前に懸案であつた第九章破我品の校合から着手する。

- 二、『婆沙論』三訳および関係諸本を対校し、訳語を与えた対照テキストを作成する。

- 三、六足論および発智論にみられる仏教用語を定義づけた部分を抽出し、用語集を作る。ここでは上の資料の中からも並行して抽出作業を行ない、将来的にはアビダルマ仏教語辞典のようなものの完成を目指す。

研究目的で述べたように、本年度は暫く一を凍結し、二、三について重点的に遂行する。

### 2、真宗学 三業惑乱関連書籍の翻刻と註釈（二年次）

主任・殿内 恒 研究員七名

（研究の目的）

江戸幕府は宗教統制政策の一環として、仏教諸宗派の学問を

奨励したが、実際の宗学研鑽は、研究教授機関の整備、修学体系の制度化、さらには印刷技術や出版事業によって可能となった。本研究は、近世における仏教研究と出版事業との関わり的一端を、浄土真宗本願寺派の教学論争である三業惑乱を手がかりに窺うものである。

三業惑乱は、本願寺派第六代能化功存（一七二〇—一七九六）が著した『願生帰命弁』（一七六四刊）に対する批判から始まったと言える。やがて天明年間になると、大麟（生没年不詳）や宝巖（生没年不詳）によって批判書が出され、以後十数年にわたり、主として批判論駁書の刊行を通して論争が繰り広げられていった。

しかしながら、従来の研究では『願生帰命弁』と、その論駁書である大瀛（二七五九—一八〇四）の『横超直道金剛辨』（二八〇一刊）のみに研究が集中し、『横超直道金剛辨』が出版されるまでの論争書のはほとんどは、和綴本のまま翻刻されていない状況である。

本計画は、『横超直道金剛辨』が出版されるまでの論争書から代表的なものを翻刻し、併せて註釈的研究を行い、それらを公開していくことを目的とする研究の一環である。具体的には、三業惑乱に関連する第一次資料群を広く公開し、研究の一助とすることが本研究プロジェクトの第一次目標であり、従来の研究で等閑に付されがちであった、論争に関する書籍群の内容研究を行うことが第二次目標である。

この研究目的を達成するために二〇〇八年度以降、共同研究・個人研究を通して従来注目されてこなかった関連資料の収集、翻刻並びに註釈的研究を継続してきた。二〇一三年度も、これまでの研究により蓄積された成果の上に、より包括的な研究を進展させるべく、さらなる関連資料の収集と、収集資料の翻刻並びに註釈的研究に向け、二〇一二年度に引き続き共同研究を申請するものである。

二〇〇八年度以降、功存『願生帰命弁』刊本に加えて、原稿本・草稿本の資料収集、並びにそれらの総合的な註釈的研究を

## （研究計画）

### 3. 臨床心理学 悩みに対する宗教的・心理的アプローチに関する研究（一年度）

主任・吉川

悟 研究員一〇名

（研究の目的）

多くの人は大なり小なり悩みを抱えて生活している。同時に、長い歴史をかけて人々は悩みの解決方法について模索してきた。

悩みの解決方法について考えると、人間の悩みは大きく分けて二種類ある。一つは宗教的な悩みであり、もう一つは心理的な悩みである。この宗教的な悩みは、仏教でいう四苦八苦すなわち生苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦などであり、このうち死に対する悩みが中心でありすべての人々に共通である。これに対して心理的な悩みは、日常生活における個々の悩みであり、この世を如何に生きていくのが中心となる。

従来の日本では、これらの悩みに対しての解決方法は、各々の檀家寺の住職に相談することが多かった。しかし近年、人々の悩みも多様化し、単なる人間性や経験だけでは対応しきれなくなってきた。このため、人々の悩みに対応するには、一定の知識と技術が要求され、今日、多種多様な臨床心理学的アプローチ（カウンセリング）という概念ができあがり発展してきた。我々は二〇一一年度、二〇一二年度と継続研究を行いその結果、生死を中心とした宗教的な悩みに対するアプローチと日常生活を中心とした心理的悩みに対するアプローチには、技法的

#### (研究計画)

な相違点があるものの、悩みの本質に焦点をあてることで、心理的な悩みに対するアプローチから宗教的な悩みに対するアプローチへと進んでいくという二つのアプローチの連続性を見出した。そこで、本研究はこれまでの研究成果の集大成とするべく、宗教活動と悩みの相談活動の統合を試み、そのモデルを提示したい。

#### 〈二〇一一年度〉

宗教的悩みと心理学的悩みの接点と相違点について理論的に説明した。

具体的には「臨床における気付きと宗教における目覚め(二〇一一)」において、その悩みの内容は、宗教的悩みは人類共通の人間としての本質的な悩みであることに對し、心理的悩みは、個人的な日常生活上の悩みであることがわかった。

#### 〈二〇一二年度〉

これらの異なる悩みを解決するため、宗教的なアプローチ特に仏教によるものを、人と人間を超えたものの智慧との関係として、心理的なアプローチによるものを、人と人との関係として分析し、宗教的悟りを「目覚め」とし、心理的解決を「気づき」として、比較検討をした。その結果以下のようなことがわかった。

日常生活上の悩みは、悩みを持つ人自身の「気づき」により解決するが、すぐにまた新しい悩みが生じ、その解決のために新たな「気づき」が必要となる。つまり悩みと「気づき」は連環している。一方、人類共通の本質的な悩みは、人間を超えたものの智慧により「目覚め」させられ解決し、そしてその「目覚め」はただ一度であり、再度の悩みに悩まされることはないという方向性の関係であることがわかった。

#### 〈本年度〉

これまでの研究結果より、悩みの根本的な解決のためには、まず日常生活上の悩みに対する心理的なアプローチを導入とし、次に人類共通の本質的な悩みに対する宗教的なアプローチへとつないでいく必要が示唆された。そこで「気づき」から

#### 4. 仏教学

鎌倉期の東大寺とその周辺に関する研究(一年度)

主任・藤丸

「目覚め」にむけた相談活動モデルを提示すべく、仏教と心理学の理論的検討と、実際の相談活動による事例検討を行う。

要 研究員四名

鎌倉時代は政治・経済のみならず、仏教界においても様々な展開を示した時代であった。いわゆる鎌倉新仏教の興起は言うに及ばず、伝統仏教界においても新たな展開を認めることができる。

そのような中、日本仏教の大本を自負していた東大寺は、治承四年(一一八〇)に平重衡による南都焼討という大惨事に見舞われる。東大寺は大仏殿をはじめ、主要建築のほとんどを焼失するに至り、法華堂・二月堂・転害門・正倉院以外はすべて灰燼に帰してしまった。その後、重源(一一二六―一二〇六)を先頭に、伽藍の復興および教学の復興がはかられるが、どのようにして復興されていったのかについては、特に教学面においてはあまり研究が進んでいないと言えない状況である。

本研究においては、このような東大寺について特に南都焼討後の教学復興について、その前後の様相を中心に、東大寺に遺されている古文獻を活用しつつ検討して行きたいと思う。さらに、東大寺復興にあたっては、伽藍および教学ともに中国宋代の仏教からの強い影響が認められる。故に、中国における仏教特に華嚴教学を中心に東大寺に与えた影響をも考察して研究を進めて行きたい。

なお、本研究を進めるにあたっては、従来の資料に加えて新資料である諸「論義」等の古文獻を用いながら、新たな視点より、東大寺における教学復興の特色を明らかにして行く所存である。

本研究においては、以下の4点より検討し考察を加えていきたい。

まず、第一に東大寺の華嚴についてである。東大寺は八宗兼学の道場ではあるが、華嚴をもって根本と為している。その華嚴は、従来尊勝院を中心に研鑽が為されてきたが、鎌倉時代の

#### (研究計画)

学者凝然(一二四〇—一三二一)以後は、彼が住した戒壇院も華嚴の道場として機能するようになっていった。そこで、東大寺における尊勝院と戒壇院の両華嚴について、東大寺図書館等に蔵されている論義などの古文獻を用いつつ検討して行きたい。

次に、日本華嚴のもう一つの流れとしての高山寺華嚴についても論究して行く。高山寺華嚴は明恵上人高弁(一一七三—一二三二)に代表され、密教的実践がその特徴であるとされる。しかし、高弁は東大寺に学んだ景雅から強い影響を受けており、高山寺華嚴と東大寺の華嚴が別系統とみるには疑念が残る。そのため、高山寺の華嚴学の再検討のために、古文獻等を用いつつ解明して行きたいと考える。

第三に、東大寺のみならず、鎌倉期は戒律の復興が叫ばれた時代でもあった。泉涌寺の俊苒(一一六六—一二二七)が将来した北京律は南都の南京律にも影響を及ぼし、律宗の再興期に結びついて行く。しかし、東大寺には戒壇院が存在し、律の根本道場となっていたにも関わらず、その教学については明確になっていない。したがって、これも東大寺等に遺されている古文獻を解説しつつ、検討を加えて行きたい。

最後に、当時の東大寺の教学形成に強い影響を与えたのが、中国宋代の仏教である。先述の俊苒等の入宋によって、新たな仏教が日本へもたらされたのであるが、それが特に東大寺においてどのように結実して行つたのか未だ不明な点が多い。今回は、特に華嚴の分野において、中国での華嚴教学が如何にして東大寺華嚴の成立に影響を及ぼしたのかを検討して行く予定である。

なお、東大寺図書館から「肝要抄」、「華嚴宗問題略文義抄」、「華嚴宗論題」、「勸学講論義題」等および智積院所蔵の「華嚴五教章」注釈書等はすでに収集しており、翻刻作業に入っている。

主任・赤松

徹眞 研究員十名

(研究の目的)

本研究は、親鸞像の歴史の変遷を文獻・図像等の史料を精緻に分析することによって、その変遷のなかに親鸞像の社会的定着を明らかにすることを目的とする。とりわけ、中世での親鸞の実像が描かれ、記録され、社会的に定着してきた。しかしながら、親鸞像が描かれ、記録され、社会的に定着してきた。しかしながら、教団形成に関わって形成された親鸞像は、近代以降の歴史観の多様性にもなっており、教団が形成してきた親鸞像とは相違する親鸞像が描かれ、論じられてきた。

そのような動向のなかで、本研究は、親鸞像の歴史の変遷を文獻・図像などの検討から、歴史的過程・背景とともに親鸞像の歴史の変遷を実証的に明らかにしつつ、親鸞像の宗教的立場と歴史社会との関係性について研究の知見を提起しようとするものである。

二年度は、親鸞像の歴史の変遷について、引き続き文獻・図像などの分析・検討を加えて、中間報告を重ねることとする。三年度目となる本年は、親鸞像の歴史の変遷に関する文獻・図像などの分析・検討に基づいて、研究のとりまとめとして、中間報告を重ねて、とりまとめを行う。

(研究計画)

本研究は、親鸞像の実像を十三世紀の歴史社会および親鸞を取り巻く仏教的環境を踏まえて、専修念仏に帰依して生涯を歩んだ親鸞の実像を明確にする。そして親鸞像の歴史の変遷を分析するには、諸本がある「親鸞伝絵」の親鸞像を分析・検討することをはじめ、「鏡御影」などの彫像や木像などの検討が欠かせない。その後の教団形成のなかで親鸞像は、一定の定まった親鸞像が形成されていった。したがって、本研究を推進するには、文獻・記録・図像などの収集による親鸞像の整理が必要となるため、組織的な研究の取り組みが欠かせないと考える。その際、親鸞像の検証には、親鸞の宗教的立場と社会との関係がどのようなものとしてあったのかという方法意識をもって整理する。

さらに、近代の歴史社会は、歴史像の多様性を生みだし、教団の描いた親鸞像を相対化する親鸞像が語られ、記録されたが、それらは多様な親鸞像を生み出すものであったため、文献・記録などの収集、整理・検討が必要となる。

本研究には、文献・図像・木像などに見られる親鸞像の整理が欠かせないため、史料調査等を含めて取り組んでいきたい。

## 2、真宗学 龍谷大学図書館真宗古文庫の研究（二年度）

主任・内藤 知康 研究員二名

### （研究の目的）

龍谷大学図書館には、真宗関係の貴重な古文庫が多数所蔵されており、それは他図書館に例を見ない本学図書館の特徴である。それらの古文庫は、主に大宮西賢書庫、写字台文庫、新写字台文庫、龍谷蔵等にわたって収蔵・保管されているが、貴重なものであっても、いまだその資料的価値や思想内容に関する評価が、十分でないまま放置されている文献も少なくない。

本研究プロジェクトは、それら龍谷大学図書館に所蔵される注目すべき真宗古文庫を取り上げ研究するものであり、かかる基礎的な文献研究を通して、今後の真宗学研究の更なる進展に寄与することを目的とするものである。

なお、本研究プロジェクトに言うところの「真宗古文庫」とは、基本的に江戸時代までの真宗関係の写本ならびに版本を意図している。

### （研究計画）

初年度（二〇二二年度）は、基礎的研究として、これまでの龍谷大学図書館所蔵を中心とした真宗古文庫に関する研究成果・資料を網羅的に収集し、研究状況の把握と整理を行う。また、研究員相互の研鑽を目的とした真宗古文庫に関する研究会を行う（必要に応じ外部講師を招聘する）とともに、研究談話会を開催して広く意見交換を行う。

次年度（二〇二三年度）は、研究成果・資料の収集と整理、真宗古文庫に関する研究会、研究談話会の開催を継続しつつ、研究対象とすべき文献のピックアップならびに個々の文献研究を進めていく。

最終年度（二〇二四年度）は、個々の文献研究の継続とともに

に、研究談話会等の開催を通してその成果を共有し、さらに深めていく。その上で、各種学会での研究発表・論文執筆を行い、最終的な研究成果をまとめる。また、資料収集の整理を行う。

## 3、仏教学 仏教写本の文献学的研究（二年度）

主任・若原 雄昭 研究員三九名

### （研究の目的）

仏教研究は先ず何よりも確実な文献学的研究の上に進められなければならない。文献学的研究は厳密な写本資料批判にもとづかなければならない。本プロジェクトは、インド・チベット仏教、西域仏教、そして日本・中国仏教を専門領域とする仏教学科教員が一体となり、学外の専門研究者とも連携しつつ、本学所蔵の豊富な資料を活用し又広く国内外に新資料を求めながら、各々の分野における学的基礎となる写本資料に関する共同研究を展開し、以て斯学の一層の発展に寄与せんとするものである。

インド・チベット仏教の領域では、現在中国西藏自治区で次々と再発見されつつある梵語仏典写本を中日両国の研究者が協力して研究する体制を確立し、写本の批判的校訂出版などを通じて世界の仏教学界に貢献することを目指す。研究分担者桂の数年來の努力によって、西藏僧院に保存されてきた梵文写本写真・画像データを保管する北京の中国蔵学研究中心と本学の緊密な学術交流は既に軌道に乗り、二〇二一年秋に両者間の正式な学術協定が締結された。期間内の具体的・個別的な目標は、下記の研究計画・方法欄において写本の研究や出版計画として後述する如くである。西域分野に於ては、大谷探検隊将来写本資料を主たる対象に、国内外の同種資料とも比較対照しつつ継続して研究して行く。日本仏教の分野に於いては、天台、浄土教、法相唯識、華嚴宗関連の写本を所蔵する諸寺・図書館の所蔵調査と研究を進める。中国仏教の分野では、漢訳経論写本を中国仏教教学史との関連に留意しつつ、また地理的・時代的狀況を反映する石刻経論と比較しながら研究する。

主たる研究目的である中国蔵学研究中心と本学との人的交流を更に推進する。桂・若原両名に他の研究者を加えて同中心訪

### （研究計画）

間を重ね交流の実を挙げる。二〇一三年度中に蔵学中心からの招聘が確定しているのは、沼田奨学金受給を申請中の同助理研究員拉先加博士であるが、他にも引き続き中心側から派遣される研究者を受け入れる予定である。二〇一二年度中に来学する同中心のダンドウル所長、李學竹研究員、羅鴻副研究員は、それぞれアティシヤ著作の研究、「人中論」及び他の新写本『阿毘達磨集論』、後期インド仏教論書新写本の研究を進め、その成果を逐次蔵学研究中心から刊行していく。李・藤田両氏による五百頌般若経梵文写本校訂出版計画は二〇一二年度中に校訂作業を終えて、二〇一三年度には出版の予定である。写本の種別に応じて、梵語仏典写本研究の第一人者仏教大学松田和信教授、既に蔵学研究中心から写本校訂出版の実績のある人文情報学研究所主席研究員苦米地等流博士、中観仏教研究の權威である東京大学斉藤明教授、涅槃経他大乘經典研究の第一人者同下田正弘教授、西藏僧院伝来の写本研究で優れた業績を挙げた加納和雄高野山大学助教、ネパール写本を中心として梵文写本全般に精通する京都大学文学研究科Divakar Acharya教授、ネパール写本やネワール語に詳しい種智院大学Sudan Shakyas教授、桂の主催する研究会の中心メンバーである岡崎康浩氏に協力を求める。併せて、若原はバングラデシ国内での梵文写本探索を継続して得られた成果を報告すると共に、一定の資料的価値を有するものがあれば研究を進める。

西域分野では三谷が中心となって大谷探検隊将来資料を所蔵する本学をはじめとする国内研究機関や、中国旅順博物館など国外所蔵機関と連携して探検隊収集の仏教写本の総合的調査を行う。また、同時期に同地域から収集されたドイツ隊将来資料との比較対照研究を推進するとともに、国際敦煌プロジェクト(IDP)のネットワークを最大限活用しながら、敦煌・トルファン出土の仏教写本に関する国際的・学際的研究をめざす。

日本仏教分野では、下記研究経過欄に示したような従来の実績を踏まえて、滋賀・京都・奈良を中心に古写本を収蔵する諸寺や図書館の所蔵調査と研究を進める。浅田・道元は天台関係

## D 特別指定研究

### 1、大谷探検隊将来資料の総合的研究

主任・入澤 崇 研究員六三名

(研究の目的・計画)

本研究は大谷探検隊が中央アジアで収集した資料の全容を明らかにすることを目的とする。半世紀の歴史を有する本研究会がかつて出版した『西域文化研究』全六巻はわが国における西域研究の基盤を作り上げたばかりか、国際的にも評価の高い、まさに西域学の一大金字塔であった。しかし、近年の内外における西域学の進展は目を見張るものがあり、『西域文化研究』はそろそろ過去のものとなりつつある。そこで本研究会は長期計画(二〇一一年度―二〇二二年度)の到達目標として、近年の研究成果を盛り込んだ新たな『西域文化研究』の刊行を掲げる。その目標を実現するために、以下の四つの班を編成し準備にあたる。

#### ①大谷探検隊将来文字資料の調査研究(代表…三谷真澄)

本研究会の伝統である写本研究を継続して行い、「トルファン写本」、「敦煌写本」の研究を主にし、二〇〇二年より旅順博物館との共同研究が開始され、旅順博物館所蔵の大谷探検隊将来資料の調査研究が本格化してきた。同館所蔵の二六〇〇〇点にも及ぶ漢文仏典写本の同定作業は日中双方で遂行された。

二〇一一年度までの非漢字資料の調査研究により、文献資料の基礎的研究は終えたので、二〇一三年度は、ベルリンやイスタンブルに所蔵されるドイツ隊将来資料や、IDPの国



際ネットワークを活用して比較対照研究にあたる。

## ②西域仏教美術の調査研究(代表・宮治昭)

大谷探検隊が収集した美術資料の研究を主としつつ、西域仏教美術の総合的研究を目指す。西域仏教美術はガンダーラ仏教美術の影響を強く受けており、両者の比較検討が急務となる。近年、トカラ語仏教圏の壁画研究が進展しつつあり、本研究班もそれを十分にふまえたうえで、二〇一三年度は第一次大谷探検隊が調査をしたクチャのキジル石窟壁画に焦点をあて、ガンダーラ仏教美術との比較研究をなす。

## ③モンゴル仏教寺院址の調査研究(代表・村岡倫)

昨年度に引き続き、第二次大谷探検隊の行ったモンゴル調査の検証をなす。第二次大谷探検隊によるモンゴル調査はモンゴル研究の先駆をなしながら、これまで十分に検証がなされてこなかった。近年、大谷大学のチーム(代表・松川節)が現地調査を敢行し、研究の先鞭をつけた。大谷大学とも連携をとりながら、二〇一三年度は第二次大谷探検隊のエルザニゾー寺院の調査を検証していく。

## ④西域仏教遺跡と大谷探検隊の調査研究(代表・入澤崇)

大谷探検隊が目指した仏教の広がりを探求する精神を継承し、西域仏教遺跡の総合的研究をなす。二〇一三年度は大谷探検隊の隊員が残した日記類を検証していく。大谷探検隊の調査動向を探っていく。併せて、トルファン研究所及びトルファン博物館と緊密な関係を構築して、遺跡に関する新情報の入手に努める。近年新たに仏教遺跡が確認されたキルギス共和国に関しても、詳しい情報を入手していく。

## 2、大正新脩大藏經の學術用語に関する研究

主任・淺田 正博 研究員十五名

(研究の目的・計画)

本研究は、大正新脩大藏經を中心とする漢文仏典中の重要語を抽出・整理し、分析・研究を加えることに目的がある。漢文仏典とは、漢文によって翻訳・著述された經・律・論とその注釈書類を含み、中国・朝鮮半島・日本など東アジアに展開した仏教思想や文化の基盤となった文献群を総称する。本研究では、

そうした漢文仏典中の重要語(仏教要語)を抽出し、その用例を検討することによって、その要語の意味する内容が、時代や地域性に依拠していかなる変遷をたどったのかを明らかにし、仏教思想・文化の多様な展開を跡づけた。

上記の目的に則り、二〇一三年度も前年度に引き続き、二種類テーマを求めて検討を行いたい。第一には、「戒律関係用語」の研究である。東アジアにおいては「四分律」を中心とする戒律の詳細な文献が、数多く述作されたが、それらはきわめて難解な内容を有するため十分な読解・研究が行われてこなかった。また、そうした戒律文献の読解にあたっては、戒律特有の要語に対する知識が必要であるが、従来それらの要語を解説する辞典(事典)は公刊されてこなかった。そこで本研究では、主に「四分律」とその注釈書類に類出する語句について平易な解説文を作成し、加えて出典等の調査を行うことで、初学者向けの「戒律を知るための小辞典」の出版を目指したい。

第二に、「仏教における生死観に関する學術用語の研究」である。本研究では、現在社会問題ともなっている「自死(自殺)」や「安楽死」「尊厳死」などの問題を含めた「生死」に関する仏教用語を検討したい。仏教は苦悩の本質的な解決を指向するものであるが、とりわけ生老病死に代表される生死にまつわる苦悩について多くの言及が残されてきた。本研究では、そうした要語に着目し、經典の原意と註疏類の解釈を求め、なかで、仏教が生死の問題をいかに理解するかについて考察を行いたい。

研究の進め方は以下の通りである。まず、本研究会の構成員を中心に、主に漢文仏教要語に関心を持つ研究者や院生を加えた研究会を、月一回程度開催し、テーマである「仏教における生死観に関する學術用語の研究」に関する発表を行う(公開可)。手法としては、原則として、經典の原意・註釈書の解釈を並記し、その他の特徴的な要素も加えながら発表を行い、参加者同士の議論を通して、さらに洗練された内容にしていく。年次研究において「生死」の要語に関する研究成果については、「佛

『教文化研究所紀要』に発表したい。

『戒律を知るための小辞典』については、現在の段階で原稿化された項目の再検討を行い、用例の検討を通して意味内容の確定を行う。さらに出典の調査や用語の統一などを通して全体的なバランスをはかりたい。出版形態については、初学者が手取りやすく、利便性の高い構成や判型を検討するなど調整作業を行っている。

### 3、仏教経典の翻訳と研究

主任・アニス ヒロタ 研究員三九名

(研究の目的・計画) Purpose of the Center

—to encourage and support the translation and/or publication of writings that will further the understanding of Pure Land Buddhist thought and teachings, and to explore contemporary methods for the study of Buddhist texts, from broad international perspectives. Such writings, which will be published through the Center as Center publications, include:

- primary Buddhist texts (sutras, treatises, traditional commentaries, significant historical writings);
- modern secondary literature on Pure Land Buddhist thought and teachings, including both scholarly and popularly oriented approaches;
- comparative and interreligious treatments of Pure Land Buddhist thought and teachings.

Because academic treatments of Pure Land Buddhist tradition undertaken in other parts of the world are at present primarily historical and sociological in methodology and have adequate venues for publication elsewhere, the Center feels a particular commitment to approaches treating Japanese Pure Land Buddhist thought in contemporary interpretive, comparative, theological, and philosophical perspective.

Activities of the Center

—the major activity of the Center is the preparation and review of translations of primary Buddhist texts that further the understanding of Pure Land Buddhist tradition, particularly the Japanese tradition.

—the Center also encourages the preparation of publication as Center publications translations and original secondary studies that advance its basic aims.

—the Center will sponsor public lectures, workshops, and symposia that advance its basic aims. Such presentations will be published as monographs and edited volumes through the Center as Center publications.

Activities of the Center during 2013-2014

During this period, two translations continued to be reviewed at the general meetings: Muryōju nyorai-e and Hasshū kōyō.

A Workshops related to the discussion of translation and Pure Land Buddhist thought in a contemporary, comparative context were held, with the results of the presentations published from the Center.

Manuscripts were sought, particularly from Shin Buddhist ministers abroad, to continue the Dharma Talk Series aimed at a popular audience.

Selected publications from the Center will be made accessible online. This should acquaint readers around the world with the Center and increase sales of Center publications.

Efforts continue to be made to increase sales of publications through Shin temples and temple bookstores abroad.

### E 個人研究

#### 1、仏教社会事業の研究

中西 直樹

(研究の目的)

本研究は、戦前期において仏教各宗派が発行した社会事業関係の刊行物を調査・収集し、資料集『戦前期仏教社会事業資料集成』としてまとめ、復刊・刊行することを目的としている。この資料集は、すでに一部が不二出版から刊行されており、その構成等は以下の通りである。

各宗派共同編 第一〜二巻

浄土真宗本願寺派編 第三〜六巻 (第一期 二〇一一年九月刊行)

真宗大谷派編 第七〜八巻 (第二期 二〇一二年七月刊行)

浄土宗編 第九〜十巻 (第二期 二〇一二年七月刊行)

諸宗派編 第一〜二巻 (第三期 二〇一三年六月刊行予定)

別編 第一三巻 (第三期 二〇一三年六月刊行予定)

この資料集は、高石史人氏(筑紫女学園大学教授)、菊池正治氏(久留米大学教授)と小職の三名が編者となり、小職が編集代表として、各宗派共同編・浄土宗編・諸宗派編の解題を担当することとなっている。また、各編の解題を収録した小冊子『戦前期仏教社会事業の研究』を二〇一三年九月に刊行する予定である。

(研究計画) 戦前期において仏教が社会事業に果たした役割は大きく、各宗派が発行した関係の刊行物も膨大な数にのぼる。しかし、それらは、宗派機関や宗門系大学の図書館等にまともって保存されておらず、仏教団の活動の全貌を把握することは困難な状況にある。そこで、要覧・便覧の類を中心に、各宗派が発行した刊行物のなかから主要なものを選んで復刊し、併せて戦前期における仏教団の社会事業への取り組みの実態を明らかにしようという目的から、『戦前期仏教社会事業資料集成』を刊行する。

まず各研究機関等に所蔵されている要覧・便覧の類を中心に、各宗派が発行した刊行物の複写等を収集する。これについては、ほぼ二〇一二年中に完了する予定である。さらに解題の執筆のため、各宗派の関係雑誌等から、社会事業関係記事の複写を収集する。その上で、上記第三期に刊行を予定している諸宗派編の解題を執筆し、小冊子『戦前期仏教社会事業の研究』の編集に着手したい。

◇平成二十五年度 兼任・客員研究員(新規)◇(順不同)

- 大取班 近藤美奈子(甲南女子大学非常勤講師)
- 川添班 藤丸 要(本学経済学部教授)
- 英俊(本学非常勤講師) 野呂 靖(本学文学部講師)
- 山崎 真純(本学大学院文学研究科研究員) 大谷 由香(日本学術振興会特別研究員)
- 生) 中西 俊英(東大寺総合文化センター 敎学研究所研究員)
- 殿内班 葛野 洋明(本学大学院実践真宗学研究科教授)
- 北岑 大至(本学非常勤講師) 内藤班
- 吉川 班 貴島 信行(本学大学院実践真宗学研究科教授)
- 吾勝 常行(本学文学部教授) 田畑 正久(本学大学院実践真宗学研究科教授)
- 滋野 井一博(本学文学部教授) 児玉 龍治(本学文学部准教授) 早島 理(本学大学院実践真宗学研究科教授)
- 小正 浩徳(本学文学部講師) 赤田 太郎(本学短期大学部講師) 若原班
- 伊東 秀章(本学大学院文学研究員) 白館 戒雲(大谷大学名誉教授)
- 生・非常勤講師) コンカールタナラック プラボンサツ
- 吉村 哲明(弘前愛成会病院精神科医師) ク(本学非常勤講師・タンマガイ)
- 李 光潯(東西心理学研究所所長) 寺院大阪別院住職)

入澤班

ジェイソン プロタス(スタンフォード

大学宗教学部講師)

濱下 武志(東京大学名誉教授)

平岡三峰子(花園大学非常勤講師)

浅田班

李 鐘壽(東国大学校仏教学術院正六

研究教授)

ヒロタ班

スチーブンミラー(マサチューセッツ大学

教授)

個人研究

中西 直樹(本学文学部教授)

二〇一三年度龍谷大学沼田奨学金研究奨

学金受給者及び外国人客員研究員

氏 名 拉先加氏(中国 中国蔵学

研究中心宗教研究所・助理研

究員)

研究課題 「安多政教史」的文南大学研

究

指導教授 若原雄昭 文学部教授

研究期間 二〇一三年九月一日〜二〇一

三年十二月三十一日

氏 名 ハルンアルラシッド氏(パ

ングラデッシュ 国立タッカ

大学社会科学部政治学教科

授・同大副学長)

研究課題 一九九七年平和協定と現地諸

民族の宗教的・文化的アイデ

ンティティーバングラデシ

ユ・チッタゴン山岳地帯(C

HT)の状況―

指導教授 若原雄昭 文学部教授

研究期間 二〇一四年二月一日〜二〇

一四年三月三十一日

氏 名 ジェシカダウン スターリン

グ氏(米国 カリフォルニア

大学パークレー校日本研究セ

ンター研究員)

研究課題 近世の浄土真宗の寺院におけ

る女性に対する宗教教育と近

現代の真宗寺院の教化活動に

おける女性の役割の発展につ

いて

指導教授 那須英勝 文学部教授

研究期間 二〇一三年五月一日〜二〇一

三年七月三十一日

### ◇研究所日誌◇

―平成二十四年度(後期)―

一月二十三日(水) 午後〇時三十分〜

午後一時二十分

第六回運営会議開催

1. 仏教文化研究所紀要第五一集の執

筆者について(追加)

2. 二〇一二年沼田奨学金(研究奨

学金)及び外国人客員研究員の辞退

について

3. 二〇一二年沼田奨学金(研究

奨学金)及び外国人客員研究員の期

間変更について

4. 二〇一三年度沼田奨学金(研究奨

学金)及び外国人客員研究員任用予

定者の期間変更について

5. 評価要項の変更について

一月二十四日(木) 午後六時〜午後八

時

第十三回研究談話会(吉川研究室)

会場 大宮学舎清風館B-10二教

室

講題 悩みに対する宗教的・心理的

アプローチに関する研究

講師 友久久雄氏(本学文学部特任

教授)

一月二十九日(火) 午後五時〜午後六

時十五分

第十四回研究談話会(内藤研究室)

会場 大宮学舎 西翼三階小会議室

講題 真宗古文書の概要

講師 三栗章夫氏(浄土真宗本願寺

派総合研究所上級研究員)

一月三十日(水) 午後四時三十分〜午

後六時

第十五回研究談話会(青原研究室)

会場 大宮学舎 西翼三階小会議室

講題 俱舍論研究の現状と展望

講師 武田宏道氏(本学元教授)

二月二十五日(月) 午後二時〜午後四

時

第十三回仏教文化セミナー

会場 大宮学舎 南翼107教室

講題 宗紙の八代集注釈【詞字注】

について

講師 小田 剛氏(本学仏教文化研

究所客員研究員)

二月二十七日(水) 午後一時十五分〜

午後三時四十五分

第十六回研究談話会(ヒロタ研究室)

会場 大宮学舎 西翼二階大会議室

講題 真言密教思想の英訳問題…

「即身成仏」を中心に

講師 亀山隆彦氏(本学客員研究員)

三月十三日(水) 午後〇時二十分〜午

後〇時四十分

第七回運営会議開催

1. 二〇一三年度運営体制・運営会議

構成員について

2. 二〇一三年度兼任研究員・客員研

究員について

三月二十一日(木) 午後四時〜午後五

時三十分

第十四回仏教文化セミナー

会場 大宮学舎 西翼二階会議室

講題 近代仏教者の自殺観

講師 小野嶋祥雄氏(本学仏教文化

研究所客員研究員)

三月二十六日(火) 午後六時三十分〜

午後八時

第十七回研究談話会(赤松研究室)

会場 大宮学舎本館二階会議室

講題 室町・戦国期の親鸞像

講師 金龍 静氏(本願寺史料研究

所副所長)

―平成二十五年度(前期)―

四月二十四日(水) 午後〇時三十分〜

午後一時二十分

第一回運営会議開催

1. 二〇一三年度研究体制・役員について

2. 二〇一三年度客員研究員の追加・取消・変更について

3. 二〇一三年度研究所予算について

4. 仏教文化研究所紀要第五十二集・所報第三十七号の執筆予定者について

5. 二〇一三年度仏教文化講演会・仏教文化セミナー・研究談話会の開催について

6. 二〇一三年度研究PJ研究年次経過報告書の評価について

五月二日(木) 午後一時十五分～午後二時三十分

第一回研究談話会(ヒロタ研究室)  
会場 大宮学舎西翼二階大会議室

講題 「仏教と和歌―翻訳の問題も含めて―」

講師 ステイブンミラー氏  
(マサチューセッツ州立大学  
アマハースト校教授)

五月十三日(月) 午後三時～午後五時

第二回研究談話会(入澤研究室)  
会場 大宮学舎西翼二階大会議室

講題 「ベルリンの仏教事情―漢文  
仏典写本の目録化を中心とし  
て―」

講師 三谷真澄氏(本学国際文化学  
部教授)

講題 巻談「敦煌秘笈」

講師 古泉圓順氏(四天王寺大学名  
誉教授)

六月五日(水) 午後〇時四十分～午後一時五分

第二回運営会議開催

1. 二〇一三年度研究PJ年次経過報告書の評価について

2. 二〇一三年度研究PJ年次経過報告書に関するヒアリングについて

3. 二〇一三年度仏教文化講演会の開催について※第八十回・第八十一回  
六月二十日(木) 午後三時～午後四時三十分

第三回研究談話会(ヒロタ研究室)  
会場 大宮学舎西翼二階大会議室

講題 親鸞と無量寿経

講師 大田利生氏(本学名誉教授)

講題 Dimensions of Narration in  
Shiran's Reading of the  
Sutra of Immeasurable Life:  
a view through the lens of  
Mieke Bal's narratology  
《無量寿経》における物語の  
意味:ミーク・バルの物語論  
による考察

講師 Prof.David Matsumoto  
(Institute of Buddhist  
Studies)

七月十一日(木) 午後三時～午後四時三十分

第八十回仏教文化講演会  
会場 龍谷大学大宮学舎 清和館三

階ホール  
講題 「法滅」からの再生―東大寺  
再建における西行を中心に―

講師 石川 一氏(県立広島大学人  
間文化学部国際文化学科教  
授)

七月十七日(水) 午後〇時三十分～午後一時

第三回運営会議開催

1. 二〇一四年度研究プロジェクト募集について

2. 二〇一四年度専任研究員の募集について

3. 二〇一四年度善本叢書・仏教文化  
研究所叢書の出版助成募集について

七月二十二日(月) 午後六時三十分～午後八時

第四回研究談話会(赤松研究室)  
会場 大宮学舎西翼三階小会議室

講題 二葉憲香の親鸞論―戦後仏教  
史研究の一断面―

講師 近藤俊太郎氏(本学仏教文化  
研究所客員研究員)

七月三十一日(水) 午後六時二十五分～午後七時五十分

第五回研究談話会(赤松研究室)  
会場 大宮学舎南翼一〇五教室

講題 現代沖繩と親鸞思想

講師 福島榮寿氏(大谷大学准教授)

会場 大宮学舎 西翼二階大会議室

講題 来迎芸術の生成と変容

報告者 入澤 崇氏(本学文学部教  
授・龍谷ミュージアム館長)

ファシリテーター 三谷真澄氏(本学国際  
文化学部教授)

コメンテーター 宮治 昭氏(本学人  
間・科学・宗教総合研究セン  
ター研究フェロー)

十月二十一日(月) 午後三時～午後五時四十分

第十五回仏教文化セミナー  
会場 大宮学舎 清風館三階共同研  
究室三〇一・三〇二

講題 在東欧所蔵の敦煌吐魯番漢文  
文書・典籍の現状と課題

講師 小口雅史氏(法政大学文学部  
教授)

講題 南齊竟陵文宣王所持の「維  
義記」残簡・「敦煌秘笈」羽  
二七一録文研究

講師 白田 淳三氏(本学仏教文化  
研究所客員研究員)

十月二十三日(水) 午後〇時三十分～午後一時十分

第四回運営会議開催

1. 二〇一四年度専任研究員について

2. 二〇一四年度出版助成(善本叢書  
・研究叢書)の予算案について

3. 二〇一四年度研究プロジェクト採  
用審査について

4. 二〇一四年度沼田奨学金(研究奨

（学金）受給者の推薦審査および外国人客員研究員の任用について

5. 二〇一三年度沼田奨学金（研究奨学金）及び外国人客員研究員任用者の期間変更について

6. 二〇一三年度仏教文化研究所客員研究員への研究者番号発行について  
十月二十四日（木） 午後三時～午後四時三十分

第七回研究談話会（ヒロタ研究班）

会場 大宮学舎 西賢二階大会議室  
講題 ヨーロッパにおける浄土真宗とその翻訳の諸問題

講師 ジェローム・テュコール氏  
（ジュネーブ民族博物館東洋部室長）

十一月二十八日（木） 午後一時十五分～午後二時四十五分

第八十一回仏教文化講演会

会場 大宮学舎清和館三階ホール  
講題 真宗におけるカウンセリングプロセス—生きる喜びの成就—

講師 謙 西賢氏（岐阜聖徳学園大学・教育学部学校心理課程教授）

授）

十二月十一日（水） 午後六時三十分～午後八時

第八回研究談話会（赤松研究班）

会場 大宮学舎 西賢二階大会議室  
講題 法主と国家—昭和初期における真宗大谷派革新運動をめぐ

つて—

講師 碧海寿広氏（本学アジア仏教文化研究センター博士研究員）

十二月十二日（木） 午後四時～午後五時三十分

第九回研究談話会（浅田研究班）

会場 大宮学舎 西賢二階大会議室  
講題 仏典にみる殺生—仏教における「善き生き方」の探究—

講師 道元徹心氏（本学理工学部准教授）

十二月十九日（木） 午後一時十五分～午後二時四十五分

第十回研究談話会（若原研究班）

会場 大宮学舎 西賢二階大会議室  
講題 多田等観諸来チベット資料の基礎研究—チベットの仏伝図

【秋尊絵伝】とその源流—

報告者 能仁正顕氏（本学文学部教授）  
ファシリテーター 入澤 崇氏（本学文学部教授・龍谷ミュージアム館長）

ム館長）

コメンテーター 宮治 昭氏（本学人間・科学・宗教総合研究センター研究フェロー）

平成二十五年十二月二十六日発行

龍谷大学 仏教文化研究所

代表者 内 藤 知 康

〒六〇〇—八二六八

京都市下京区七条通大宮東入

大工町二二五—一

電話〇七五(343) 三三一—(代)

内線5400

# 仏教文化研究所規程

設立  
制 定  
一部改正

昭和三十六年 四月 一日  
昭和六三年 二月 一日  
平成四年 一月 一六日  
平成六年 六月 九日  
平成一一年 一月 二五日  
平成一三年 九月 二七日  
平成一四年 五月 一六日  
平成一五年 五月 一五日  
平成一九年 七月 五日  
平成二四年 四月 一日

## 第一章 総 則

(目的)

第一条 この規程は、龍谷大学学則第七〇条に定める  
仏教文化研究所(以下「仏文研」という。)につい  
て、その組織及び運営等必要な事項を定めること  
を目的とする。

(所在地)

第二条 仏文研は、龍谷大学大官学舎内に置く。

(仏文研の目的)

第三条 仏文研は、仏教文化及びその関連領域に關  
する総合的學術研究並びに国際的研究交流を行い、も  
つて學術研究の向上に寄与することを目的とする。

(事業)

第四条 仏文研は、前条の目的を達成するために次の  
事業を行う。

- (1) 仏教文化及びその関連領域に關する研究・調査
- (2) 研究・調査に必要な図書・資料及び情報の収  
集・管理
- (3) 紀要、叢書、所報等研究成果の刊行
- (4) 研究会、公開講座、講演会等の開催
- (5) 国内外の大学及び研究機関との研究交流

(6) その他前条の目的を遂行するために必要な事業

## 第二章 運営會議

(運営會議)

第五条 仏文研に、重要な事項について審議・決定す  
るため、仏教文化研究所運営會議(以下「運営會議」  
という。)を置く。

二 次の各号に掲げる事項は、運営會議において決定  
する。

- (1) 事業計画に關すること。
- (2) 研究所予算に關すること。
- (3) 指定研究、研究プロジェクトの設置・廃止に關  
すること。
- (4) 研究員及び委託研究員の受入れに關すること。
- (5) その他仏文研における重要な事項

(構成)

第六条 運営會議は、次の各号に掲げるもので構成す  
る。

- (1) 所長及び副所長
- (2) 文学部教授会が選任する者 七名
- (3) 短期大学部教授会が選任する者 一名
- (4) 学長が指名する者 若干名
- (5) 専任研究員
- (6) 研究部事務部長

二 前項第二号、第三号、第四号及び第五号による者  
の任期は、一年とする。ただし、再任を妨げない。

(招集)

第七条 運営會議は、所長が必要と認める都度招集し、  
所長は會議の議長となる。

(定足数等)

第八条 運営會議は、構成員の過半数の出席により成  
立し、議事は出席者の過半数の同意により決定する。

## 第三章 組 織

(部の設置)  
第九条 仏文研に研究調査部及び事業部を設ける。

二 研究調査部は、第四条に規定する事業のうち、研  
究及び調査並びに各指定研究及び各研究プロジェクト  
の推進・調整に關する事業を分担する。

三 事業部は、第四条に規定する事業のうち、資料の  
収集・整理及び研究成果の公刊並びに研究交流等に  
關する事業を分担する。

(指定研究)

第一〇条 仏文研に、特定の課題を研究する指定研究  
を置く。

(研究プロジェクト)

第一一条 仏文研に、常設研究プロジェクト・特別指  
定研究プロジェクト及び時限研究プロジェクトを置  
く。

二 常設研究プロジェクトは、次のとおりとする。

- (1) 真宗学研究プロジェクト
  - (2) 仏教学研究プロジェクト
  - (3) 仏教史学研究プロジェクト
- 三 特別指定研究プロジェクトは、次のとおりとする。
- (1) 西域文化研究会
  - (2) 西蔵翻訳研究会
  - (3) 大蔵經學術用語研究会
- 四 時限研究プロジェクトは、必要の都度設置する。

(付属研究センター)

第一二条 仏文研に設置する指定研究及び研究プロジ  
ェクトは、研究の活性化・高度化を推進するために  
運営會議が必要と認める場合「付属研究センター」  
を呼称することができる。

二 付属研究センターの運営等については別途に定め  
る。

## 第四章 職員組織

(所長、副所長)

第一三条 仏文研に、所長及び副所長各一名を置く。  
二 所長は、仏文研の業務を統括し、仏文研を代表す  
る。  
三 副所長は、所長を補佐し、所長事故ある時はその  
職務を代理する。

四 所長及び副所長は、運営会議の推薦する者に対して、学長が任命する。  
五 所長及び副所長の任期は、二年とする。ただし、再任を妨げない。

(主任)

第一四條 第九条に定める部に、主任各一名を置く。  
二 主任は、各部の業務を調整処理する。  
三 主任は、本学(短期大学部を含む。以下、同じ)の専任教職員の内から、運営会議において選任する。

(主査)

第一五條 第一条に定める研究プロジェクトには、それぞれ主査一名を置く。  
二 主査は、当該研究プロジェクトを主宰し、その活動を調整推進する。  
三 主査は、本学専任教職員の内から、運営会議において選任する。

(常任委員会)

第一六條 運営会議の決定事項の執行及び委任事項の処理並びに日常業務の連絡・調整を図るため、所長のもとに常任委員会を置く。  
二 常任委員会は、次の各号の者で構成する。

- (1) 所長及び副所長
  - (2) 第一四條に定める主任
  - (3) 運営会議が選任する者 若干名
  - (4) 仏文研課長
- 三 常任委員会には、必要に応じて主査を加えることができる。

## 第五章 研究員

(研究員)

第一七條 仏文研に、次に掲げる研究員を置く。

- (1) 専任研究員
- (2) 兼任研究員
- (3) 客員研究員
- (4) 嘱託研究員

(専任研究員)  
第一八條 専任研究員は、仏文研に所属する専任教職員で、専ら研究・調査に従事する者をいう。  
二 専任研究員の任用については、別に定める。

(兼任研究員)

第一九條 兼任研究員は、仏文研の活動に参加する本学の専任教職員をいう。  
二 兼任研究員は、所長が候補者を推薦し、学長が委嘱する。ただし、その候補者が専任教職員である場合は、その候補者の所属する教授会の承認を得るものとする。  
三 専任教職員は所長に対して、兼任研究員となることを願出ることができるものとする。  
四 兼任研究員の任期は、一年間又は二年間とする。ただし、再任を妨げない。

(客員研究員)

第二〇條 客員研究員は、学外の研究者でその身分のまま一定期間仏文研に所属して、研究・調査活動に従事する者をいう。  
二 客員研究員は、所長が候補者を推薦し、運営会議の承認を経て、学長が委嘱する。

(嘱託研究員)

第二一條 嘱託研究員は、前三條に規定する以外の者で仏文研の活動に参加する者をいう。  
二 嘱託研究員の任用は、前条第二項の規定を準用する。

(受託研究員)

第二二條 仏文研は、受託研究員を受入れることができる。  
二 受託研究員の受入れについては、別に定める。

## 第六章 補則

(事務)

第二三條 仏文研に、仏文研の事務を処理するため 仏文研事務室を置く。  
二 仏文研事務室に、必要な事務職員を置く。

(改廃)

第二四條 この規程の改正又は廃止は、運営会議の決議により大学評議会において決定する。

付則

- 一 この規程は、昭和六三年二月一日から施行する。
  - 二 この規程の施行に伴い、従前の龍谷大学仏教文化研究所規程(昭和六三年四月一日施行)は、廃止する。
  - 三 この規程施行当初の所長は、第一二條の規定にかかわらず従前の規定による所長があたるものとし、運営会議は、第六條の規定にかかわらず従前の規定による協議委員を以て構成するものとする。
- 付則(平成四年一月一六日題名、第一条改正)  
この規程は、平成四年一月一六日から施行する。  
付則(平成六年六月九日第六條改正)  
この規程は、平成六年六月九日から施行する。  
付則(平成十一年一月二五日第一条改正)  
この規程は、平成十一年一月二五日から施行する。  
付則(抄)(平成二十三年九月二七日第六條改正)  
この規程は、平成二十三年九月二七日から施行する。  
付則(平成一四年五月一六日第六條改正)  
この規程は、平成一四年五月一六日から施行する。  
付則(平成一五年五月一五日第五條改正)  
この規程は、平成一五年五月一五日から施行する。  
一 この規程は、平成一五年四月一日から施行する。  
二 この規程の施行に伴い、現に、仏教文化研究所事務室事務長にある者は、この規程による課長とみなす。  
付則(平成一九年七月五日第一二條新設、第一三條以下繰下、第一六條改正)  
この規程は、平成一九年七月五日から施行する。  
付則(平成二四年三月一日第五條、第六條、第九條、第一一條、第一二條、第一六條改正)  
この規程は、平成二四年四月一日から施行する。



〈平成二十四年度登録図書一覧〉

CLS/BANO/VOLNO OPTCLM3

203.1/ K O R /1 高麗大藏經 1 /高麗大藏經編輯委員會編 1  
203.1/ K O R /2 高麗大藏經 2 /高麗大藏經編輯委員會編 2  
203.1/ K O R /3 高麗大藏經 3 /高麗大藏經編輯委員會編 3  
203.1/ K O R /4 高麗大藏經 4 /高麗大藏經編輯委員會編 4  
203.1/ K O R /5 高麗大藏經 5 /高麗大藏經編輯委員會編 5  
203.1/ K O R /6 高麗大藏經 6 /高麗大藏經編輯委員會編 6  
203.1/ K O R /7 高麗大藏經 7 /高麗大藏經編輯委員會編 7  
203.1/ K O R /8 高麗大藏經 8 /高麗大藏經編輯委員會編 8  
203.1/ K O R /9 高麗大藏經 9 /高麗大藏經編輯委員會編 9  
203.1/ K O R /10 高麗大藏經 10 /高麗大藏經編輯委員會編 10  
203.1/ K O R /11 高麗大藏經 11 /高麗大藏經編輯委員會編 11  
203.1/ K O R /12 高麗大藏經 12 /高麗大藏經編輯委員會編 12  
203.1/ K O R /13 高麗大藏經 13 /高麗大藏經編輯委員會編 13  
203.1/ K O R /14 高麗大藏經 14 /高麗大藏經編輯委員會編 14  
203.1/ K O R /15 高麗大藏經 15 /高麗大藏經編輯委員會編 15  
203.1/ K O R /16 高麗大藏經 16 /高麗大藏經編輯委員會編 16  
203.1/ K O R /17 高麗大藏經 17 /高麗大藏經編輯委員會編 17  
203.1/ K O R /18 高麗大藏經 18 /高麗大藏經編輯委員會編 18  
203.1/ K O R /19 高麗大藏經 19 /高麗大藏經編輯委員會編 19  
203.1/ K O R /20 高麗大藏經 20 /高麗大藏經編輯委員會編 20  
203.1/ K O R /21 高麗大藏經 21 /高麗大藏經編輯委員會編 21  
203.1/ K O R /22 高麗大藏經 22 /高麗大藏經編輯委員會編 22  
203.1/ K O R /23 高麗大藏經 23 /高麗大藏經編輯委員會編 23  
203.1/ K O R /24 高麗大藏經 24 /高麗大藏經編輯委員會編 24  
203.1/ K O R /25 高麗大藏經 25 /高麗大藏經編輯委員會編 25

203.1/ K O R /26 高麗大藏經 26 /高麗大藏經編輯委員會編 26  
203.1/ K O R /27 高麗大藏經 27 /高麗大藏經編輯委員會編 27  
203.1/ K O R /28 高麗大藏經 28 /高麗大藏經編輯委員會編 28  
203.1/ K O R /29 高麗大藏經 29 /高麗大藏經編輯委員會編 29  
203.1/ K O R /30 高麗大藏經 30 /高麗大藏經編輯委員會編 30  
203.1/ K O R /31 高麗大藏經 31 /高麗大藏經編輯委員會編 31  
203.1/ K O R /32 高麗大藏經 32 /高麗大藏經編輯委員會編 32  
203.1/ K O R /33 高麗大藏經 33 /高麗大藏經編輯委員會編 33  
203.1/ K O R /34 高麗大藏經 34 /高麗大藏經編輯委員會編 34  
203.1/ K O R /35 高麗大藏經 35 /高麗大藏經編輯委員會編 35  
203.1/ K O R /3 高麗大藏經 36 /高麗大藏經編輯委員會編 36  
203.1/ K O R /37 高麗大藏經 37 /高麗大藏經編輯委員會編 37  
203.1/ K O R /38 高麗大藏經 38 /高麗大藏經編輯委員會編 38  
203.1/ K O R /39 高麗大藏經 39 /高麗大藏經編輯委員會編 39  
203.1/ K O R /40 高麗大藏經 40 /高麗大藏經編輯委員會編 40  
203.1/ K O R /41 高麗大藏經 41 /高麗大藏經編輯委員會編 41  
203.1/ K O R /42 高麗大藏經 42 /高麗大藏經編輯委員會編 42  
203.1/ K O R /43 高麗大藏經 43 /高麗大藏經編輯委員會編 43  
203.1/ K O R /44 高麗大藏經 44 /高麗大藏經編輯委員會編 44  
203.1/ K O R /45 高麗大藏經 45 /高麗大藏經編輯委員會編 45  
203.1/ K O R /46 高麗大藏經 46 /高麗大藏經編輯委員會編 46  
203.1/ K O R /47 高麗大藏經 47 /高麗大藏經編輯委員會編 47  
203.1/ K O R /48 高麗大藏經 48 /高麗大藏經編輯委員會編 48  
203.1/ K O R /49 高麗大藏經 49 /高麗大藏經編輯委員會編 49  
203.1/ K O R /50 高麗大藏經 50 /高麗大藏經編輯委員會編 50

- 203.1/ K O R /51 高麗大藏經 51 /高麗大藏經編輯委員會編 51
- 203.1/ K O R /52 高麗大藏經 52 /高麗大藏經編輯委員會編 52
- 203.1/ K O R /53 高麗大藏經 53 /高麗大藏經編輯委員會編 53
- 203.1/ K O R /54 高麗大藏經 54 /高麗大藏經編輯委員會編 54
- 203.1/ K O R /55 高麗大藏經 55 /高麗大藏經編輯委員會編 55
- 203.1/ K O R /56 高麗大藏經 56 /高麗大藏經編輯委員會編 56
- 203.1/ K O R /57 高麗大藏經 57 /高麗大藏經編輯委員會編 57
- 203.1/ K O R /58 高麗大藏經 58 /高麗大藏經編輯委員會編 58
- 203.1/ K O R /59 高麗大藏經 59 /高麗大藏經編輯委員會編 59
- 203.1/ K O R /60 高麗大藏經 60 /高麗大藏經編輯委員會編 60
- 203.1/ K O R /61 高麗大藏經 61 /高麗大藏經編輯委員會編 61
- 203.1/ K O R /62 高麗大藏經 62 /高麗大藏經編輯委員會編 62
- 203.1/ K O R /63 高麗大藏經 63 /高麗大藏經編輯委員會編 63
- 203.1/ K O R /64 高麗大藏經 64 /高麗大藏經編輯委員會編 64
- 203.1/ K O R /65 高麗大藏經 65 /高麗大藏經編輯委員會編 65
- 203.1/ K O R /66 高麗大藏經 66 /高麗大藏經編輯委員會編 66
- 203.1/ K O R /67 高麗大藏經 67 /高麗大藏經編輯委員會編 67
- 203.1/ K O R /68 高麗大藏經 68 /高麗大藏經編輯委員會編 68
- 203.1/ K O R /69 高麗大藏經 69 /高麗大藏經編輯委員會編 69
- 203.1/ K O R /70 高麗大藏經 70 /高麗大藏經編輯委員會編 70
- 203.1/ K O R /71 高麗大藏經 71 /高麗大藏經編輯委員會編 71
- 203.1/ K O R /72 高麗大藏經 72 /高麗大藏經編輯委員會編 72
- 203.1/ K O R /73 高麗大藏經 73 /高麗大藏經編輯委員會編 73
- 203.1/ K O R /74 高麗大藏經 74 /高麗大藏經編輯委員會編 74
- 203.1/ K O R /75 高麗大藏經 75 /高麗大藏經編輯委員會編 75
- 203.1/ K O R /76 高麗大藏經 76 /高麗大藏經編輯委員會編 76
- 203.1/ K O R /77 高麗大藏經 77 /高麗大藏經編輯委員會編 77
- 203.1/ K O R /78 高麗大藏經 78 /高麗大藏經編輯委員會編 78
- 203.1/ K O R /79 高麗大藏經 79 /高麗大藏經編輯委員會編 79
- 203.1/ K O R /80 高麗大藏經 80 /高麗大藏經編輯委員會編 80
- 203/ M I N /1 民國時期佛教資料匯編 第 1 冊 /田奇選編 第 1 冊
- 203/ M I N /2 民國時期佛教資料匯編 第 2 冊 /田奇選編 第 2 冊
- 203/ M I N /3 民國時期佛教資料匯編 第 3 冊 /田奇選編 第 3 冊
- 203/ M I N /4 民國時期佛教資料匯編 第 4 冊 /田奇選編 第 4 冊
- 203/ M I N /5 民國時期佛教資料匯編 第 5 冊 /田奇選編 第 5 冊
- 203/ M I N /6 民國時期佛教資料匯編 第 6 冊 /田奇選編 第 6 冊
- 203/ M I N /7 民國時期佛教資料匯編 第 7 冊 /田奇選編 第 7 冊
- 203/ M I N /8 民國時期佛教資料匯編 第 8 冊 /田奇選編 第 8 冊
- 203/ M I N /9 民國時期佛教資料匯編 第 9 冊 /田奇選編 第 9 冊
- 203/ M I N /10 民國時期佛教資料匯編 第 10 冊 /田奇選編 第 10 冊
- 203/ M I N /11 民國時期佛教資料匯編 第 11 冊 /田奇選編 第 11 冊
- 203/ M I N /12 民國時期佛教資料匯編 第 12 冊 /田奇選編 第 12 冊
- 203/ M I N /13 民國時期佛教資料匯編 第 13 冊 /田奇選編 第 13 冊
- 203/ M I N /14 民國時期佛教資料匯編 第 14 冊 /田奇選編 第 14 冊
- 203/ M I N /15 民國時期佛教資料匯編 第 15 冊 /田奇選編 第 15 冊
- 203/ M I N /16 民國時期佛教資料匯編 第 16 冊 /田奇選編 第 16 冊
- 203/ S H I /1 新編世界佛學名著譯叢 1 /藍吉富主編 1
- 203/ S H I /2 新編世界佛學名著譯叢 2 /藍吉富主編 2
- 203/ S H I /3 新編世界佛學名著譯叢 3 /藍吉富主編 3
- 203/ S H I /4 新編世界佛學名著譯叢 4 /藍吉富主編 4
- 203/ S H I /5 新編世界佛學名著譯叢 5 /藍吉富主編 5

203/ S H I /6	新編世界佛學名著譯叢6 / 藍吉富主編 6	203/ S H I /32	新編世界佛學名著譯叢32 / 藍吉富主編 32
203/ S H I /7	新編世界佛學名著譯叢7 / 藍吉富主編 7	203/ S H I /33	新編世界佛學名著譯叢33 / 藍吉富主編 33
203/ S H I /8	新編世界佛學名著譯叢8 / 藍吉富主編 8	203/ S H I /34	新編世界佛學名著譯叢34 / 藍吉富主編 34
203/ S H I /9	新編世界佛學名著譯叢9 / 藍吉富主編 9	203/ S H I /35	新編世界佛學名著譯叢35 / 藍吉富主編 35
203/ S H I /10	新編世界佛學名著譯叢10 / 藍吉富主編 10	203/ S H I /36	新編世界佛學名著譯叢36 / 藍吉富主編 36
203/ S H I /11	新編世界佛學名著譯叢11 / 藍吉富主編 11	203/ S H I /37	新編世界佛學名著譯叢37 / 藍吉富主編 37
203/ S H I /12	新編世界佛學名著譯叢12 / 藍吉富主編 12	203/ S H I /38	新編世界佛學名著譯叢38 / 藍吉富主編 38
203/ S H I /13	新編世界佛學名著譯叢13 / 藍吉富主編 13	203/ S H I /39	新編世界佛學名著譯叢39 / 藍吉富主編 39
203/ S H I /14	新編世界佛學名著譯叢14 / 藍吉富主編 14	203/ S H I /40	新編世界佛學名著譯叢40 / 藍吉富主編 40
203/ S H I /15	新編世界佛學名著譯叢15 / 藍吉富主編 15	203/ S H I /41	新編世界佛學名著譯叢41 / 藍吉富主編 41
203/ S H I /16	新編世界佛學名著譯叢16 / 藍吉富主編 16	203/ S H I /42	新編世界佛學名著譯叢42 / 藍吉富主編 42
203/ S H I /17	新編世界佛學名著譯叢17 / 藍吉富主編 17	203/ S H I /43	新編世界佛學名著譯叢43 / 藍吉富主編 43
203/ S H I /18	新編世界佛學名著譯叢18 / 藍吉富主編 18	203/ S H I /44	新編世界佛學名著譯叢44 / 藍吉富主編 44
203/ S H I /19	新編世界佛學名著譯叢19 / 藍吉富主編 19	203/ S H I /45	新編世界佛學名著譯叢45 / 藍吉富主編 45
203/ S H I /20	新編世界佛學名著譯叢20 / 藍吉富主編 20	203/ S H I /46	新編世界佛學名著譯叢46 / 藍吉富主編 46
203/ S H I /21	新編世界佛學名著譯叢21 / 藍吉富主編 21	203/ S H I /47	新編世界佛學名著譯叢47 / 藍吉富主編 47
203/ S H I /22	新編世界佛學名著譯叢22 / 藍吉富主編 22	203/ S H I /48	新編世界佛學名著譯叢48 / 藍吉富主編 48
203/ S H I /23	新編世界佛學名著譯叢23 / 藍吉富主編 23	203/ S H I /49	新編世界佛學名著譯叢49 / 藍吉富主編 49
203/ S H I /24	新編世界佛學名著譯叢24 / 藍吉富主編 24	203/ S H I /50	新編世界佛學名著譯叢50 / 藍吉富主編 50
203/ S H I /25	新編世界佛學名著譯叢25 / 藍吉富主編 25	203/ S H I /51	新編世界佛學名著譯叢51 / 藍吉富主編 51
203/ S H I /26	新編世界佛學名著譯叢26 / 藍吉富主編 26	203/ S H I /52	新編世界佛學名著譯叢52 / 藍吉富主編 52
203/ S H I /27	新編世界佛學名著譯叢27 / 藍吉富主編 27	203/ S H I /53	新編世界佛學名著譯叢53 / 藍吉富主編 53
203/ S H I /28	新編世界佛學名著譯叢28 / 藍吉富主編 28	203/ S H I /54	新編世界佛學名著譯叢54 / 藍吉富主編 54
203/ S H I /29	新編世界佛學名著譯叢29 / 藍吉富主編 29	203/ S H I /55	新編世界佛學名著譯叢55 / 藍吉富主編 55
203/ S H I /30	新編世界佛學名著譯叢30 / 藍吉富主編 30	203/ S H I /56	新編世界佛學名著譯叢56 / 藍吉富主編 56
203/ S H I /31	新編世界佛學名著譯叢31 / 藍吉富主編 31		

203/ S H I /57	新編世界佛學名著譯叢57/藍吉富主編 57	203/ S H I /83	新編世界佛學名著譯叢83/藍吉富主編 83
203/ S H I /58	新編世界佛學名著譯叢58/藍吉富主編 58	203/ S H I /84	新編世界佛學名著譯叢84/藍吉富主編 84
203/ S H I /59	新編世界佛學名著譯叢59/藍吉富主編 59	203/ S H I /85	新編世界佛學名著譯叢85/藍吉富主編 85
203/ S H I /60	新編世界佛學名著譯叢60/藍吉富主編 60	203/ S H I /86	新編世界佛學名著譯叢86/藍吉富主編 86
203/ S H I /61	新編世界佛學名著譯叢61/藍吉富主編 61	203/ S H I /87	新編世界佛學名著譯叢87/藍吉富主編 87
203/ S H I /62	新編世界佛學名著譯叢62/藍吉富主編 62	203/ S H I /88	新編世界佛學名著譯叢88/藍吉富主編 88
203/ S H I /63	新編世界佛學名著譯叢63/藍吉富主編 63	203/ S H I /89	新編世界佛學名著譯叢89/藍吉富主編 89
203/ S H I /64	新編世界佛學名著譯叢64/藍吉富主編 64	203/ S H I /90	新編世界佛學名著譯叢90/藍吉富主編 90
203/ S H I /65	新編世界佛學名著譯叢65/藍吉富主編 65	203/ S H I /91	新編世界佛學名著譯叢91/藍吉富主編 91
203/ S H I /66	新編世界佛學名著譯叢66/藍吉富主編 66	203/ S H I /92	新編世界佛學名著譯叢92/藍吉富主編 92
203/ S H I /67	新編世界佛學名著譯叢67/藍吉富主編 67	203/ S H I /93	新編世界佛學名著譯叢93/藍吉富主編 93
203/ S H I /68	新編世界佛學名著譯叢68/藍吉富主編 68	203/ S H I /94	新編世界佛學名著譯叢94/藍吉富主編 94
203/ S H I /69	新編世界佛學名著譯叢69/藍吉富主編 69	203/ S H I /95	新編世界佛學名著譯叢95/藍吉富主編 95
203/ S H I /70	新編世界佛學名著譯叢70/藍吉富主編 70	203/ S H I /96	新編世界佛學名著譯叢96/藍吉富主編 96
203/ S H I /71	新編世界佛學名著譯叢71/藍吉富主編 71	203/ S H I /97	新編世界佛學名著譯叢97/藍吉富主編 97
203/ S H I /72	新編世界佛學名著譯叢72/藍吉富主編 72	203/ S H I /98	新編世界佛學名著譯叢98/藍吉富主編 98
203/ S H I /73	新編世界佛學名著譯叢73/藍吉富主編 73	203/ S H I /99	新編世界佛學名著譯叢99/藍吉富主編 99
203/ S H I /74	新編世界佛學名著譯叢74/藍吉富主編 74	203/ S H I /100	新編世界佛學名著譯叢100/藍吉富主編 100
203/ S H I /75	新編世界佛學名著譯叢75/藍吉富主編 75	203/ S H I /101	新編世界佛學名著譯叢101/藍吉富主編 101
203/ S H I /76	新編世界佛學名著譯叢76/藍吉富主編 76	203/ S H I /102	新編世界佛學名著譯叢102/藍吉富主編 102
203/ S H I /77	新編世界佛學名著譯叢77/藍吉富主編 77	203/ S H I /103	新編世界佛學名著譯叢103/藍吉富主編 103
203/ S H I /78	新編世界佛學名著譯叢78/藍吉富主編 78	203/ S H I /104	新編世界佛學名著譯叢104/藍吉富主編 104
203/ S H I /79	新編世界佛學名著譯叢79/藍吉富主編 79	203/ S H I /105	新編世界佛學名著譯叢105/藍吉富主編 105
203/ S H I /80	新編世界佛學名著譯叢80/藍吉富主編 80	203/ S H I /106	新編世界佛學名著譯叢106/藍吉富主編 106
203/ S H I /81	新編世界佛學名著譯叢81/藍吉富主編 81	203/ S H I /107	新編世界佛學名著譯叢107/藍吉富主編 107
203/ S H I /82	新編世界佛學名著譯叢82/藍吉富主編 82		

203/ S H I /108	新編世界佛學名著譯叢 108 / 藍吉富主編 108	編 133
203/ S H I /109	新編世界佛學名著譯叢 109 / 藍吉富主編 109	203/ S H I /134 新編世界佛學名著譯叢 134 / 藍吉富主編 134
203/ S H I /110	新編世界佛學名著譯叢 110 / 藍吉富主編 110	203/ S H I /135 新編世界佛學名著譯叢 135 / 藍吉富主編 135
203/ S H I /111	新編世界佛學名著譯叢 111 / 藍吉富主編 111	203/ S H I /136 新編世界佛學名著譯叢 136 / 藍吉富主編 136
203/ S H I /112	新編世界佛學名著譯叢 112 / 藍吉富主編 112	203/ S H I /137 新編世界佛學名著譯叢 137 / 藍吉富主編 137
203/ S H I /113	新編世界佛學名著譯叢 113 / 藍吉富主編 113	203/ S H I /138 新編世界佛學名著譯叢 138 / 藍吉富主編 138
203/ S H I /114	新編世界佛學名著譯叢 114 / 藍吉富主編 114	203/ S H I /139 新編世界佛學名著譯叢 139 / 藍吉富主編 139
203/ S H I /115	新編世界佛學名著譯叢 115 / 藍吉富主編 115	203/ S H I /140 新編世界佛學名著譯叢 140 / 藍吉富主編 140
203/ S H I /116	新編世界佛學名著譯叢 116 / 藍吉富主編 116	203/ S H I /141 新編世界佛學名著譯叢 141 / 藍吉富主編 141
203/ S H I /117	新編世界佛學名著譯叢 117 / 藍吉富主編 117	203/ S H I /142 新編世界佛學名著譯叢 142 / 藍吉富主編 142
203/ S H I /118	新編世界佛學名著譯叢 118 / 藍吉富主編 118	203/ S H I /143 新編世界佛學名著譯叢 143 / 藍吉富主編 143
203/ S H I /119	新編世界佛學名著譯叢 119 / 藍吉富主編 119	203/ S H I /144 新編世界佛學名著譯叢 144 / 藍吉富主編 144
203/ S H I /120	新編世界佛學名著譯叢 120 / 藍吉富主編 120	203/ S H I /145 新編世界佛學名著譯叢 145 / 藍吉富主編 145
203/ S H I /121	新編世界佛學名著譯叢 121 / 藍吉富主編 121	203/ S H I /146 新編世界佛學名著譯叢 146 / 藍吉富主編 146
203/ S H I /122	新編世界佛學名著譯叢 122 / 藍吉富主編 122	203/ S H I /147 新編世界佛學名著譯叢 147 / 藍吉富主編 147
203/ S H I /123	新編世界佛學名著譯叢 123 / 藍吉富主編 123	203/ S H I /148 新編世界佛學名著譯叢 148 / 藍吉富主編 148
203/ S H I /124	新編世界佛學名著譯叢 124 / 藍吉富主編 124	203/ S H I /149 新編世界佛學名著譯叢 149 / 藍吉富主編 149
203/ S H I /125	新編世界佛學名著譯叢 125 / 藍吉富主編 125	203/ S H I /150 新編世界佛學名著譯叢 150 / 藍吉富主編 150
203/ S H I /126	新編世界佛學名著譯叢 126 / 藍吉富主編 126	203/ S H I /151 新編世界佛學名著譯叢 151 / 藍吉富主編 151
203/ S H I /127	新編世界佛學名著譯叢 127 / 藍吉富主編 127	422035/ T O K /17 唐研究 第17卷 / 榮新江主編 第17卷
203/ S H I /128	新編世界佛學名著譯叢 128 / 藍吉富主編 128	0173/ I N T /13 List of publications received no.13 / [International College for Advanced Buddhist Studies Library], no. 13
203/ S H I /129	新編世界佛學名著譯叢 129 / 藍吉富主編 129	011.2/ G A N 金剛山寺の版本：(財) 大和文化財保存会援助事業による / 元興寺文化財研究所 [編]
203/ S H I /130	新編世界佛學名著譯叢 130 / 藍吉富主編 130	081/ R Y U /27 問答と論争の仏教：宗教的コミュニケーションの射程 / マルティン・レップ, 井上善幸編
203/ S H I /131	新編世界佛學名著譯叢 131 / 藍吉富主編 131	081/ R Y U /28 典籍と史料 / 大取一馬編
203/ S H I /132	新編世界佛學名著譯叢 131 / 藍吉富主編 132	360.6/ W C R WCRP の歴史：宗教協力による平和への実践 / WCRP 歴史編纂委員会編
203/ S H I /133	新編世界佛學名著譯叢 133 / 藍吉富主編 133	696/ T E M テーマ「HIV/エイズを通してアフリ

- カの貧困・人権・暴力を考える：宗教者の役割]  
5168/ T E M テーマ「核兵器のない世界をめざして」～NPT再検討会議、ARMS DOWN!から～
- 3604/ A J I アジアにおける平和の創造：第七回アジア宗教者平和会議・決定事項  
057/91/38 浄土宗の文化と美術：研究発表と座談会／赤尾栄慶編集代表
- 208/ S T M /28 A lexicographical study of An Shigao's and his circle's Chinese translations of Buddhist texts / Tilmann Vetter
- 266/ M I N /28 民國密宗期刊文獻集成 第28卷／于瑞華主編，中國人民大學佛教與宗教學理論研究所匯編 第28卷
- 266/ M I N /29 民國密宗期刊文獻集成 第29卷／于瑞華主編，中國人民大學佛教與宗教學理論研究所匯編 第29卷
- 266/ M I N /30 民國密宗期刊文獻集成 第30卷／于瑞華主編，中國人民大學佛教與宗教學理論研究所匯編 第30卷
- 266/ M I N /31 民國密宗期刊文獻集成 第31卷／于瑞華主編，中國人民大學佛教與宗教學理論研究所匯編 第31卷
- 266/ M I N /32 民國密宗期刊文獻集成 第32卷／于瑞華主編，中國人民大學佛教與宗教學理論研究所匯編 第32卷
- 266/ M I N /33 民國密宗期刊文獻集成 第33卷／于瑞華主編，中國人民大學佛教與宗教學理論研究所匯編 第33卷
- 266/ M I N /34 民國密宗期刊文獻集成 第34卷／于瑞華主編，中國人民大學佛教與宗教學理論研究所匯編 第34卷
- 266/ M I N /35 民國密宗期刊文獻集成 第35卷／于瑞華主編，中國人民大學佛教與宗教學理論研究所匯編 第35卷
- 266/ M I N /36 民國密宗期刊文獻集成 第36卷／于瑞華主編，中國人民大學佛教與宗教學理論研究所匯編 第36卷
- 266/ M I N /37 民國密宗期刊文獻集成 第37卷／于瑞華主編，中國人民大學佛教與宗教學理論研究所匯編 第37卷
- 266/ M I N /39 民國密宗期刊文獻集成 第39卷／于瑞華主編，中國人民大學佛教與宗教學理論研究所匯編 第39卷
- 266/ M I N /40 民國密宗期刊文獻集成 第40卷／于瑞華主編，中國人民大學佛教與宗教學理論研究所匯編 第40卷
- 266/ M I N /41 民國密宗期刊文獻集成 第41卷／于瑞華主編，中國人民大學佛教與宗教學理論研究所匯編 第41卷
- 266/ M I N /42 民國密宗期刊文獻集成 第42卷／于瑞華主編，中國人民大學佛教與宗教學理論研究所匯編 第42卷
- 023/1161/6-14 俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所藏黑水城文獻14／俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所，中國社會科學院民族研究所，上海古籍出版社編14
- 023/1161/6-15 俄羅斯科學院東方文獻研究所藏黑水城文獻15／俄羅斯科學院東方文獻研究所，中國社會科學院民族學與人類學研究所，上海古籍出版社編15
- 023/1161/6-16 俄羅斯科學院東方文獻研究所藏黑水城文獻16／俄羅斯科學院東方文獻研究所，中國社會科學院民族學與人類學研究所，上海古籍出版社編16
- 285.59/ S E N /7 戰前期仏教社会事業資料集成 第7卷：真宗大谷派編1 第7卷：真宗大谷派編1
- 285.59/ S E N /8 戰前期仏教社会事業資料集成 第8卷：真宗大谷派編2 第8卷：真宗大谷派編2
- 285.59/ S E N /9 戰前期仏教社会事業資料集成 第9卷：浄土宗編1 第9卷：浄土宗編1
- 285.59/ S E N /10 戰前期仏教社会事業資料集成 第10卷：浄土宗編2 第10卷：浄土宗編2
- 413.6/ S U W /1 諏訪史／宮地直一著 第2卷 前編 第2卷 前編
- 413.6/ S U W /2 諏訪史／宮地直一著 第2卷 後編 第2卷 後編
- 023/1161/6-17 俄羅斯科學院東方文獻研究所藏黑水城文獻17／俄羅斯科學院東方文獻研究所，中國社會科學院民族學與人類學研究所，上海古籍出版社編17
- 023/1161/6-18 俄羅斯科學院東方文獻研究所藏黑水城文獻18／俄羅斯科學院東方文獻研究所，中國社會科學院民族學與人類學研究所，上海古籍出版社編18
- 023.1/529/1 大般若波羅密多經卷第二百六
- 023.1/529/2 大般若波羅密多經卷第五百八十一
- 023.1/529/3 大寶積經卷第一百十一
- 023.1/529/4 大方等大集經卷第四十三
- 023.1/529/5 妙法蓮華經卷第七
- 023.1/529/6 阿惟越致遮經卷上
- 023.1/529/7 大雲經請雨品第六十四
- 023.1/529/8 雜阿含經卷第三十
- 023.1/529/9 雜阿含經卷第三十九
- 023.1/529/10 仏本行集經卷第十九
- 023.1/529/11 十誦尼律卷第四十六
- 023.1/529/12 御製秘藏詮
- 023.1/529/B 開寶遺珍〔解説〕／方廣錫，李際寧主

	編 [解説]		34
2062/ B U K /12	曼荼羅集経弁本／赤尾栄慶編集代表	052/530	大乘淑徳学園長谷川仏教文化研究所年報 35 / 長谷川仏教文化研究所 [編]
081/ K O N /107	大学とメディアとの新たな連携を求めて：教育・研究・社会貢献		35
081/ K O N /110	東アジアにおける戦争と絵画	052/530	大乘淑徳学園長谷川仏教文化研究所年報 35 / 長谷川仏教文化研究所 [編]
081/ K O N /111	日本語教育用学習支援システムを利用した読解教材の開発		35
081/ K O N /112	日本におけるマイノリティ企業家の研究	050/109	天理大学学報 62 (1-3), 63 (1-3) [225-230] / 天理大学人文学会 62(1-3), 63 (1-3) [225-230]
081/ K O N /113	アジア地域における“持続可能な未来”のための環境教育学	050/1070	人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要 25-26 / 愛知学院大学人間文化研究所 25-26
053/467	平和のための宗教：対話と協力 4 / [世界宗教者平和会議日本委員会平和研究所編集] 4	052/398,	佛教研究 39-40 / 国際佛教徒協会 [編] 39-40
050/465	愛知学院大学文学部紀要 40-41 / 愛知学院大学文学会 40-41	055/452	Maydan：中東フォーラム 28-30 / 国際大学中東研究所 28-30
050/766	アジア文化研究所研究年報 44-45 / 東洋大学アジア文化研究所 [編] 44-45	052/529	密教学会報 48-50 / 高野山大学密教学会 48-50
050/837	大谷大学研究年報 63-64 / 大谷学会 63-64	052/391	密教学研究 42-44 / 大正大学真言学研究室室内日本密教学会事務局 42-44
051/104	教化研究 147-151 / 教化研究所 [編] 147-151	050/334	横浜市立大学論叢. 人文科学系列 62 (1-3) / 横濱市立大学學術研究会編 62 (1-3)
051/146	真宗総合研究所研究紀要 27-28 / 大谷大学 [編] 27-28	050/334	横浜市立大学論叢. 人文科学系列 63 (1-3) / 横濱市立大学學術研究会編 63 (1-3)
050/623	椋山女学院大学研究論集. 人文科学篇 41-43 41-43	050/457B	立正大学人文科学研究所年報. 別冊 15-18 / 立正大学人文科学研究所 15-18
050/1078	創価大学人文論集 22-24 / 創価大学人文学会 22-24	058/774	The Arizona quarterly 67 (1-4) 67 (1-4)
052/530	大乘淑徳学園長谷川仏教文化研究所年報 29-30 / 長谷川仏教文化研究所 [編] 29-30	058/774	The Arizona quarterly 68 (1-4) 68 (1-4)
052/530	大乘淑徳学園長谷川仏教文化研究所年報 31 / 長谷川仏教文化研究所 [編] 31	054/813	East Asian history 29-31/Australian National University. Institute of Advanced Studies 29-31
052/530	大乘淑徳学園長谷川仏教文化研究所年報 32 / 長谷川仏教文化研究所 [編] 32	054/813,	East Asian history 32-35/Australian National University. Institute of Advanced Studies 32-35
052/530	大乘淑徳学園長谷川仏教文化研究所年報 32 / 長谷川仏教文化研究所 [編] 32	054/508	考古 2011 (1-4) [520-523] 2011 (1-4) [520-523]
052/530	大乘淑徳学園長谷川仏教文化研究所年報 33 / 長谷川仏教文化研究所 [編] 33	054/508	考古 2011 (5-8) [524-527] 2011 (5-8) [524-527]
052/530	大乘淑徳学園長谷川仏教文化研究所年報 33 / 長谷川仏教文化研究所 [編] 33	054/508	考古 2011 (9-12) [528-531] 2011 (9-12) [528-531]
052/530	大乘淑徳学園長谷川仏教文化研究所年報 34 / 長谷川仏教文化研究所 [編] 34	050/1061	新疆大学学报. 39 (1-3) [153-155] 哲学・人文社会科学版 = Journal of Xinjiang University 39(1-3)[153-155]
052/530	大乘淑徳学園長谷川仏教文化研究所年報 34 / 長谷川仏教文化研究所 [編] 34	050/1061	新疆大学学报. 39 (4-6) [156-158] 哲学・人文社会科学版 = Journal of Xinjiang University 39(4-6)[156-158]

052/532	中華佛學學報 23-25 23-25	050/1068	北京大學學報. 哲學社會科學版 2011
054/509,	文物 2011 (1-6) [656-661] / 文物編		(1-3) [263-265] 2011 (1-3) [263-265]
	輯委員會 2011 (1-6) [656-661]	050/1068	北京大學學報. 哲學社會科學版 2011
054/509	文物 2011 (7-12) [662-667] / 文物編		(4-6) [266-268] 2011 (4-6) [266-268]
	輯委員會 2011 (7-12) [662-667]		

~~~~~  
 RESEARCH INSTITUTE FOR BUDDHIST CULTURE  
 Ryukoku University (RIBC)  
 Kyoto, Japan December 2013.  
 ~~~~~